

## ■ 我々はどこから来たのか，我々は 何者か，我々はどこへ行くのか



太田 誠\*

ポール・ゴーギャン（1848-1903）の描いた一枚の絵の題名が本稿の題名である。ゴーギャンはフランスの画家である。この絵画は、彼がタヒチ島にて1897年ごろに描かれたもので、彼の精神世界を示した代表作といわれている。縦139 cm，横375 cmの油彩で、現在はアメリカ合衆国ボストン美術館所蔵である。筆者は、残念ながらこの絵画を見たことはない。インターネット等でどのような絵画であるかは容易に確認できるので、興味のある方はご自身でご確認いただきたい。はっとするような美しい絵画ではなく、タヒチ島から想像される明るいイメージのものでもない。筆者には、どうしても本物を見てみたいという衝動を起こさせるものではない。

しかしながら十数年前からこの絵画の題名は筆者の心の片隅にこびりついている。この題名の発する問いが時折、様々な場面で脳裏に浮かんでくるのである。この問いは、キリスト教の根本的は教理に基づくものであるとのことであるが、その奥深い宗教的な意味を研究したわけではない。きわめて単刀直入な問いがいろいろなことを考えさせてくれるのである。

我々は、個人として生を受け存在しているが、ほとんどの場合、集団の一員として生活している。すなわち、我々という場合に、何をもって我々というのかという答えはいくらでも存在する。宇宙という存在を我々というのか、地球全体なのか、生命を有するもの全体なのか、人類なのか、日本国民なのか、地域社会なのか、ある政治、経済活動団体なのか、学術活動全体なのか・・・、答えは無数といってもいい。ゴーギャンはキリスト教教理を学んでいたということであることから、キリスト教的な信条を有する人間をもって我々と考えていたかもしれないが、筆者のなかではこの題名はゴーギャンから切り離されて存在すること

になったので彼の我々を追求することはしていない。

個としての人間は、ある集団に同時に複数、個の意思に関わろうが、関わるのがなかりうが属している。そのなかで生を全うしていく。自らの意思で、あらゆる集団から離れようとしても、人類としてというような集団を考えると生きている限り、離れることはできない。我々人間の宿命ともいえるであろう。

本誌は、プレストレストコンクリート工学会の会誌であるので、本誌において我々という場合には、本工学会会員が我々であろう。この我々は、どこから来たのか、何者か、どこへ行くのかを考えてみることは無駄ではない。これを考えることは、プレストレストコンクリートがどのように発明され、発展し、日本に導入され、展開されてきたのか、また、現状抱えている課題とそれに対する我々の対処、そしてこれからのプレストレストコンクリート技術の方向性をあきらかにすることである。このなかで、個々の会員が自分の役割を認識し、個としてどこから来たのか、何者か、どこへ行くのかが見えてくるはずである。

東日本大震災から10年という節目において、本工学会として、またその会員としてこのような振り返り、認識、方向性の確認をしておくことは必要であろう。各種のイベントや特集といった形での確認も必要であるが、個のなかにきちんと記憶、記録され、将来に対する方向性のなかにそれらの記憶、記録が活かされるようになること、そういった個が集合して活動していくことが本工学会の存在の本質であると考えている。我々を取り巻く環境は絶えず変化し、そのなかで我々に求められることも変化する。しかし、本質の正しい理解に基づいていれば変化に振り回されることもなく、人類文化の発展のために貢献できることは必至である。

\* Makoto OHTA：本工学会理事  
大成建設(株) 常務執行役員 土木技術担当 土木本部国際管理部長